

私の忘れえぬ風景の思い出

野口幹夫

それは 1944 年昭和 20 年 3 月 13 日の真夜中に見た燃えさかる阿倍野の近鉄百貨店の姿です。

我が家は大阪阿倍野の旭町で印刷屋をしていました。普段は大きな印刷工場の広々とした 2 階に一家 5 人が、それぞれの部屋を与えられていましたが、その冬は、度々空襲警報が出され、2 階だと危ないからとなって、母屋の地下室に夜は一家で泊っていました。その地下室は印刷材料の保管倉庫だったのです。湿気が高く小さい手がしもやけでふくらんでいました。



私は 10 歳 金塚小学校の 4 年生でした。父は 45 歳 母 34 歳 姉は 15 歳で生野女学校の生徒、妹は 5 歳でした。

昭和 20 年 3 月 13 日、その夜は歴史に残る大阪の大空襲だったのです。父はいつもの警戒警

報と違うことに気づき、深夜にもかかわらず、一家 5 人を地下室から出し、200m 位離れた町はずれの原っぱに逃げて行ったのです。真っ暗な空を次々と B29 爆撃機が悠々と群れを成して北の方へ飛んでいきます。何もない原っぱに一家 5 人が落ち着いて座り、空をながめると B29 の爆撃機の群れが低くとび ヒュ



ルヒュルヒュルとした音がして、束がほどけたように落ちてくる焼夷弾が見えたのです。

そして原っぱの向こうに 燃えさかっている近鉄百貨店が見えるではありませんか。近鉄百貨店はそこからは 1.5 k m くらいのところであって、1 階が近鉄阿倍野駅になっていて、上がデパート。何度も足を運んだなじみのところですよ。それが火を噴いて炎のなかにあるのです。ボーゼンと眺めていました。

父はある決心をしていたのかもしれませんが。大きな洋ナシの缶詰を開けて 皆に分けてくれました。そのうまかったこと。こんなものが我が家の残っているとは思いつかず 奇跡のような一皿でした。

やがて空襲警報も解除、空も静かになり、一家は、とぼとぼと帰りました。我が家は無事だったのです。周りの家々も何事もないなじみの風景でした。その晩は疲れ切って地下室のねぐらで眠りました。

それからしばらくして 実は我が家にも焼夷弾が落ちていたことがわかりました。印刷工場 付属の倉庫のトタン屋根を貫通して落ちていたのが発見されました。不発弾だったのです。運命の分かれ道でした。今ある自分ももしこれが爆発していたら違った道を歩んでいたことでしょう。

あの炎に包まれた近鉄百貨店、燃えたのは上の方だけで、その後も 1 階にあった近鉄の駅は無事でした。あの日の後 1 週間もたたないうちだったとおもいますが、父は一家を連れて 知り合いの家を訪ねて、古市市誉田へ疎開しました。あの近鉄線の電車に乗って一同が荷物

をもって転居したのです。

燃えた近鉄百貨店、今は日本一ののっぽビルあべのハルカスになっています。

